

## 虚血性心筋症ならびに虚血性僧帽弁閉鎖不全症に対する外科治療

渡辺 直 聖路加国際病院ハートセンター心臓血管外科

Percutaneous trans-catheter coronary intervention therapeutics (PCI) の技術ならびに器具の進歩、相応しての適応拡大により、これまで右肩上がりに増加し心臓血管外科手術を牽引してきた冠動脈バイパス術(2004年のannual reportで本邦開心術総数50,000例のうちの約20,000例を占める実績<sup>1)</sup>)の施行数に頭打ちの傾向が見られ、この傾向はさらに2005年からのdrug-eluting stent導入によって顕著となりつつある<sup>2)</sup>。

定量的な変化と並行し、内容の点でも、虚血性心疾患の外科治療内容は単純な単独冠動脈バイパス術から、より高度、びまん性の病変に対する難易度の高いものにシフトし、また、広範囲心筋梗塞や虚血性心筋障害のために心拡大、形態変形を来し僧帽弁閉鎖不全を伴うに至った心不全、低左心機能症例の相対的増加を来すに至っている。

これからの心臓血管外科医は、治療法のパラダイムシフトと同時に人口構成の変化を踏まえ、今日的ニーズとして、高齢者の弁膜疾患、大血管疾患というリスクの高い症例に対処すると同時に、同じく、あるいはそれ以上にハイリスクの、このような重症虚血性心疾患に有効な手だてを提示しつつ立ち向かってゆかなければならないという困難な課題を担っていると言えよう。

今回のトピックでは虚血性僧帽弁閉鎖不全を虚血性心筋症の一病態として総合的にとらえ、包括的に、血行再建、心形態の復元化、ならびに弁膜機能改善構築を図る、という見方で外科治療について検討を行うこととした。

この分野で本邦のトップを走る代表的施設の先達に執筆をお願いするにあたり、上記の観点に準拠しつつも自由にお書きいただいたが、同時にその際、review的な内容に終始せず、あくまで各施設での臨床経験や研究成果を十分に踏まえて報告ならびに論旨を展開いただけるよう依頼した。

具体的内容についての個別私見は控えるが、執筆陣の所属施設でのすばらしい臨床成績の報告、ならびにその実践を支えるきちんとした理論的考察を拝読し、非常に勉強になり、これに大いに感謝の念をいざくとともに、これらの論文が、いまだ世界的にも十分に確立された方策がないこの外科治療法分野において、まさしく国際的レベルで先頭を走る情報発信である、との実感を強くし、深く敬意を感じた。ご多忙中のなかを短時間でこのように価値ある論文をご執筆いただいたことに、あらためて篤く御礼を申し上げる。

本特集を読まれる心臓血管外科医ならびに循環器専門医の読者の皆様にも、この特集から得ること非常に大であろうと確信している。

### 文 献

- 1) Committee of Scientific Affairs: Thoracic and cardiovascular surgery in Japan during 2004. Jpn Ann Thorac Surg 2006; 54: 363-386
- 2) Conroy MM: STS: Introduction of drug eluting stents triggers decline in coronary artery bypass graft procedures. <http://www.pslgroup.com/dg/2499B6.htm>